

中世における自己確証*

一韓日が共通に持ち得た三国世界観を中心に一

朴正義**

(e-mail : kannan322@hotmail.com)

目次

- 1 はじめに
 - 2 三国的世界観
 - 3 仏教の普遍的的世界
 - 4 おわりに
-

1 はじめに

韓日の史書、例えば韓国の資料『広開土王碑文』『三国史記』『三国遺事』、日本の資料『古事記』『日本書紀』は確かに歴史書としての形式を保ってはいるが、書かれた時期の国家の理念を完成するのを目的として記されている。つまり、書かれた当時の国家の保全と永遠の繁栄を祈念すべく書かれたものといえる。当然のごとくそこに語られているのは正確な古代史とは言い難い。これらは、すでに神野志隆光氏らによって明らかにされ、また拙著「天皇を保障した『古事記』」¹⁾・「韓日古代神話と中世神話にあらわれた世界観の比較」²⁾によっても述べたところである。さらに、それぞれ編纂された時代の相違、その時の歴史に対する要求がことなり、それぞれに別々の世界観が描かれている。史書にとって問題は、時代に応じて自己をどのように確証するかであった。

古代東アジアにおける唯一の世界観は一元帝国主義的世界観³⁾であった。これは、中

* 이 논문은 2010년도 원광대학교 교내연구비로 연구함.

** 圓光大學校 日本語教育學科 日本學 朴正義

1) 朴正義(2001年)「天皇を保障した『古事記』」日本學報 第46輯 p.p.373~388

2) 朴正義(2002年)「韓日古代神話と中世神話にあらわれた世界観の比較」日本文化學報 12輯 p.p.277~293

国の皇帝を唯一世界の中心として秩序が保たれた世界観で、世界は全て皇帝の支配するというものである。この中にあって、周辺諸国特に当時の東アジアにおける先進国である韓日両国はこの世界観を模倣し、自国を唯一世界の中心とする独自の一元帝国主義的世界観を持つことに成功した。これを表したのが、韓国では『広開土王碑文』、日本では『古事記』である。

『広開土王碑文』は、中国を排除した上で高句麗を唯一の中心とする世界観を表した⁴⁾。しかし、これは過去の歴史が現実の世界を保障し、それを未来につなぐものであった。中国の最初の皇帝は秦始皇帝であるが、これはその偉業故に皇帝になった現実の世界である。始皇帝を初代皇帝として未来を保障するものとして万世一系の皇帝が語られた。つまり、現実の世界が未来を保障するのである。しかし、高句麗は『広開土王碑文』が保障する世界である。それには、高句麗が開けたのは天帝の意志によるもので、また歴代の王が天帝の血統であることによって、『広開土王碑文』を建立した長寿王そして高句麗王朝が世界の中心であることを保障するものである。

この『広開土王碑文』より約300年遅れて書かれた『古事記』は、律令国家完成とともに書かれたもので、そこに「皇帝」に匹敵する「天皇」というものを完成し、「天皇」を世界の秩序の中心とする世界観を著わした。『古事記』は陰陽論でなく「天地初発時」から産靈(ムスヒ)のエネルギーで世界が成り立っていくことを語り、天御中主神→伊邪那岐神→天照大御神→迺迺芸命→初代天皇神武と展開して、『古事記』神代の骨格を形成する。『古事記』も過去が現実の世界を保障し、それが未来へと続く万世一系の「天皇」が保障する。当然のごとくここには中国は含まれず、新羅・百済を藩国としたうえでの唯一の帝国として日本が成り立つ。

この様に、中国の一元帝国主義的世界観を模倣し、韓日は自国とその体制を保障した。そこに『広開土王碑文』と『古事記』があったといえる。ここでは、実際の世界がどうであってかは問われていない。『広開土王碑文』と『古事記』が作り出した歴史である。

中国はこの一元帝国主義的世界観を近代まで持ち続けたが、しかし韓日は時代の変遷とともに、この一元帝国主義的世界観では現実世界を納得させることができなくなり、それに代わる新しい世界観を模索する必要があった。本研究は、古代の一元帝国主義的世界観から抽出し、中世にどのような世界観でもって自国を保障したのか、つまり古代神話にあらわれた世界観がどのように変遷したかを究明しようとするものである。

3) この一元帝國的な世界観というのは、近代のように大英帝国やドイツ帝国そしてアメリカ帝国・大日本帝国などの多元的に帝国が存在しお互いが争ったのではなく、世界にある帝国は唯一中国だけ、その他の国はすべて中国の属国であるという世界観を意味し、このため多元的に対して一元的という言葉を使った。

4) 權五曄(2000年)「한일 건국신화의 세계관」日本文化研究 第3輯 韓國日本學協會 p.p.65~75

2 三国の世界観

まず、この章で、世界の中心であるはずの「天皇」を日本はどのように保障したかから考えていきたい。「天皇」を保障することは、日本国を保障することを意味する。何故ならば、「天皇」が国体の中心として存在していたためである。

「皇帝」というのは世界の秩序と言えるもので、その秩序は「皇帝」の「徳」と「礼」「法」によって保たもたれた⁵⁾。この中で「徳」は「皇帝」が国家世界を統治する能力・資質をいうが、これは具体的に目に見えるものではなく、それを支えるのが「礼」「法」で、「礼」は政治に關した礼という制度、「法」は法律である。これを真似た日本では、「天皇」の「徳」は「天地初発之時」から天御中主神→天照大御神→神武天皇を受け継ぐ血統として『古事記』によって保障された。そして、律令制度の完成により、「礼」「法」に支えられた「徳」を備えた世界の秩序の中心としての「天皇」が完成したと言える。

しかし、中世における律令国家の崩壊とともに、かつて『古事記』の神話が支えていた世界観は、現実世界を根拠づける機能を果たし得なくなってきた。これは、「天皇」の「徳」を保障していた「礼」と「法」の崩壊、さらに世界の秩序の中心であるという天皇の「徳」もその根拠を失いつつあった。中世では仏教思想が隆盛を極め、宮中においても仏典の講釈会が設けられた。即ち、世界秩序の中心であるはずの「天皇」も仏教に深く帰依していた状況下では、仏教を無視したうえで世界観は何ら意味をなさないものとなったのである。ここに、世界の成り立ちから、そしてその秩序の中心である「天皇」のありかたを、問い直す必要に迫られた。このような時書かれたのが、北畠親房の『神皇正統記』である。

『神皇正統記』は「大日本者神国也」（文部省社会教育局『神皇正統記』⁶⁾と日本国を神国として規定することから始まるが、次に

同じ世界の中なれば、天地開闢の始は何くもかはるべきならねど、三国の説各異也。（文部省社会教育局『神皇正統記』⁷⁾

と述べ、世界の成り立ちを、まず天竺を仏教の四劫説で語り、ついで震旦の開闢説をかたり、最後に本朝の神代の物語へと繋いだ。これらは、それぞれ世界の成り立ちの形態は異なるが、同じ世界のはじまりを表現したものとして三国の所伝を並列させたのである。

5) 濟川眞(1999年)『天皇がわかれば日本がわかる』筑摩書房 p.p.117~118

6) 文部省社会教育局(1943(1934)年)『神皇正統記』大日本教化圖書株式會社 p.1

7) 上掲書 p.1(原文)

『神皇正統記』の語る天皇の歴史も、古代の一元帝国主義的世界観を支えた神話に基づくものである。にもかかわらず、世界の成り立ちを三国的な枠組みで説明することにより、古代の神話つまり『古事記』が支えていた一元帝国主義的世界観とは異なる世界観を示したのである。それは、空間的には天竺・震旦・本朝の三国を構成し、時間的には世界という成り立ちを共有するものである。即ち、三国世界共通の普遍真理に覆われた世界観である。天竺・震旦・本朝の三国からなる枠組みで世界をみることは、当時の『日本書紀』注釈書すべてにみられる共通のものであった。

日本の中世ではもっぱら『日本書紀』が尊重された。しかも『日本書紀』全体でなく、『日本書紀』の巻一・二いわゆる神代の巻に関心が集中し、これを「神書」と呼んだ⁸⁾。「三国世界観」を受け入れた世界の成り立ちをさらに端的に示したのが、やはり『日本書紀』の注釈書である一条兼良の『日本書紀纂疏』や吉田兼俱の『日本書紀神代抄』である。

『日本書紀纂疏』は、仏典注釈書に合わせるように神代の巻の本書に逐語的に注をつけ、そこに中国の典籍と仏典を並べて引用した。例えば『日本書紀』の冒頭は「古に天地未だ割れず、陰陽分かれざれしとき」⁹⁾とある。これを『日本書紀纂疏』の注では、まず

天地は形を以て言い、陰陽は気を以て言ふ。未割とは、未だ上下の位を見ず、不分とは、未だ流行の漸を見ざるなり。¹⁰⁾

と、『日本書紀』本来の解釈である陰陽論の世界像をそのまま受け入れる。しかし、それに続け

もし小乗の説によれば、則ち、いわゆる空劫の時なり。……………前劫の終りは、即ち後劫の始め、四劫の始終は循環して已まず。けだし今、空の時なり。¹¹⁾

と、仏典の説を加えて解釈している。つまり、冒頭の「古天地未割」は、「小乗の説」即ち『俱舍論』の説で空劫¹²⁾の時を言うのだと説明し、陰陽論と仏教的宇宙論を同居さ

8) 神野志隆光(1999年)『古事記と日本書紀』講談社現代新書 p.34

9) 「古天地未割、陰陽不分時」(『日本書紀』岩波書店)

10) 「天地以形而言。陰陽以氣而言。未割者。未見上下之位。不分者。未見流行之漸也。」(『日本書紀纂疏』國民精神文化研究所)

11) 「若依小乗説。則所謂空劫之時也。劫有四種。一成。二住。三壞。四空。各有二十増減。八萬四千歳。減至十歳。々々増至八萬四千歳。謂之一轆轤。二十轆轤。是爲二十中劫。四劫有八十轆轤。是爲八十大劫。故前劫之終。即後劫之始。四劫始終。循環不已。蓋今空時也。」(『日本書紀纂疏』國民精神文化研究所)

せているといえる。これは、『日本書紀』の神話的叙述が、仏教的宇宙論と合致することを確かめ、天竺・震旦・本朝の三国世界観に基づいて記されたとするものである。

吉田兼俱¹³⁾は『日本書紀纂疏』を基にして『日本書紀』神代巻を講釈したときに、聖徳太子の言葉として次のように述べた。

吾国は種子の如く、天竺は花実の如く、震旦は枝葉なり。もし、文字無くば、則ち仏教の正理は現ずべからざるぞ。たとえば、花開き果結びて後に、此は何の樹といふを知るに相似たり。もし花実・枝葉無くば則ち神道の種子も顕はるべからざるぞ。彼の仏法すなわち神道より出づ。故に吾が国に帰するは、葉落ちて根に帰する義なり¹⁴⁾。

聖徳太子というのは仮託と言われるが、ここで述べているのは、「仏教はもと神道という種子から出て(本朝)、文字という枝葉によってささえられ(震旦)、花開き実となり(天竺)、それが日本に戻った」ということである。三国を種子(本朝)・枝葉(震旦)・花実(天竺)に譬え、むしろ価値の源は日本にあるという。そうした相対化を端的に表現すれば、『古今集延五記』(一四九二年成)にある

仏の方には天竺を本地の国(本国)とし、日域(吾国)を垂跡の国(仮の姿を現したところ)とす。神の方には月氏(天竺)を垂跡とし、日域を本地の国とすということになる。¹⁵⁾

となる。経の説くところと、儒教・道教のいうところと、『日本書紀』に述べるところが同じであるということは、すべては一つの世界の中にあるということの意味する。

また、『日本書紀神代抄』も、

此書ハ神語ト雖ドモ、漢字ヲ以テ之ヲ編ム者、神仏儒三教一致之義也。¹⁶⁾

12)この空劫と言うのは、『俱舍論』の説でいう壊劫・空劫・成劫・住劫の中の一つで、各二十劫の時間が、世界が消滅してゆく時期(壊劫)・消滅の状態が続く時期(空劫)・世界が生成してゆく時期(成劫)・生成された世界が存続し続ける時期(住劫)として連続しながら、不常に循環すると説かれている。それと引き合わせて「天地未だ割れず、陰陽わかれざれしとき」とあるのは空劫の時を言うのだと納得するのである。劫という時間はいろいろな譬喩で説明されているが、磐石劫という譬喩だと、天人が一辺一由旬=約7.4 kmの立方体の大石を百年に一度薄衣でさつと払い、石が摩滅して消去するまで払い続けても一劫はまだ終わらないという。

13)吉田兼俱(1435-1511)：神祇官の家であるト部氏から出て、その家学を大成し、吉田神道を確立した者。

14)9)の前掲書 p.44~46

15)9)の前掲書 p.45

16)神野志隆光(1997年)「解題『日本書紀纂疏』」(別冊国文学『古事記日本書紀必携』)学灯社

という。

これらは、近世の本居宣長が、震旦や天竺の教説を排して『古事記』を読むことで、他とは異なる自分達のアイデンティティーの根源である「やまとことば」から自国の古伝を見いだそうとしたのとは、根本的に異なるものである。

つまり天竺であれ、震旦であれ、同じ世界。価値を共有する世界、普遍的世界といえる。この世界の中に日本を位置づける。このような世界観を持つことによって、現実の世界を改めて説明し納得しえ、それに繋がる天皇の正統性もまた改めて根拠づけられるのである。つまり、古代の一元帝国主義的世界観からより普遍的な世界観への移行を示すことで、天皇そして日本国を保障し得たのである。

3. 仏教の普遍的的世界

『三国遺事』の古朝鮮条は「桓雄降臨」神話から始まるが、この内容をテキストに則して読んでいけば、人間界を含む六欲天の第一人者帝釈天桓因の命によって子桓雄天王が直接降りてきて、人間世界を仏教でもって教化する、となる。そして、この仏教でもって教化された世界の中において、帝釈天桓因の孫として檀君は生まれ古朝鮮を建国するのである。

さらに、仏教発祥の地天竺と韓半島とが関連する説話が『三国遺事』には多く収録されている。『三国史記』に天竺に関する記事がないのとは大きな違いである。『三国遺事』が仏教という世界の中で、そこに示された世界が地域的にも拡大しているといえる。即ち、問題は韓半島に極限されたものでない。しかし、今まで『三国遺事』に天竺の記事がある意味を問うことはなかった。

ここに、『三国遺事』に載せられた天竺の記事のいくつかをあげることにする。

まず、原宗興法厭鬻滅身条をみると、

『三國遺事』原宗興法條：他方菩薩出現於世[謂芬皇之陳那浮石寶蓋。以至洛山五臺等是也]。西域名僧降臨於境。由是併三韓而爲邦。掩四海而爲家。¹⁷⁾

(現代語訳)

他界の菩薩がこの世に現れて(これは芬皇寺の陳那と浮石寺の宝蓋。もって洛山の五台などをいう)、西域(天竺)の名僧が境内に降臨した。これによって三韓を併せて一つの国として、四海をおおって家とした。

17) 『三國遺事』卷三 興法三 原宗興法条

これには、印度の高僧が韓半島の統一に力を尽くしたと記しており、印度が韓半島に関与したことを示すものである。さらに、歸竺諸師条の記事に次のように記されている。

『三國遺事』歸竺諸師條：天竺人呼海東云矩矩吒髻說羅也。矩矩吒言鷄也。髻說羅言貴也。¹⁸⁾

(現代語訳)

天竺の人は海東(新羅)を呼ぶのに矩矩吒髻說羅といったが、矩矩吒は鶏のことであり、髻說羅は貴のことである。

ここでは、印度が遠い国の新羅を意識し、新羅を「髻說羅言貴也」と貴国とまでいう。何故意識し貴国というのか。それを具体的に述べる記事が先ほど記した駕洛国記条にある。

『三國遺事』駕洛國記條：妾是阿踰陀國公主。(略)一作夢中。同見皇天上帝。謂曰。駕洛國元君首露者。天所降而俾御大寶。乃神乃聖。惟其人乎。且以新家邦。未定匹偶。卿等湏遣公主而配之。言訖升天。¹⁹⁾

(現代語訳)

私は阿踰陀国の姫である。(略)昨夜の夢の中で、皇天上帝にお会いするに、(皇天上帝が)おっしゃるに、「駕洛国王の首露は天が降して王位に就かせたものであり、この人こそは神聖そのものである。新しく国を治めているが、未だ配偶者が決まっていない。卿達は姫を遣わしてその配偶者としなさい」。言い終わると天に昇っていかれた。

皇天上帝が王女の父王の夢に現われ、駕洛国の王は天が命じたものだから、阿踰陀国(印度)の王女を嫁に送れという記事である。この記事に関連して、同じ駕洛国記条に、駕洛国の始祖首露が皇天上帝の命によって王となる記事がある。

『三國遺事』駕洛國記條：皇天所以命我者。御是處。惟新家邦。爲君后。爲茲故降矣。²⁰⁾

(現代語訳)

皇天が私に命じるに、「ここに国を新しく建てて、(私にここの)君主になれ」。

18) 『三國遺事』卷四 義解五 歸竺諸師条

19) 『三國遺事』卷二 紀異二 駕洛國記条

20) 『三國遺事』卷二 紀異二 駕洛國記條

故に、いまここに降りてきたのだ。

この記事と前の記事が対応し、天竺と韓半島が皇天上帝の命によって結ばれ、国を創っていく物語が成立する。

さらに、塔像篇の皇竜寺九層塔条に新羅の王の祖先を印度とする記事がある。

『三國遺事』皇龍寺九層塔條：文殊又云。汝國王是天竺刹利種王。預受佛記。²¹⁾

(現代語訳)

文殊がまた云うに、「汝の(新羅の)国王は天竺の刹利種族の王で、かねてから仏記(仏の予言を記した文)を受けていた」。

これも印度と韓半島の王が血と仏教で結ばれていることを示している。

これらは全て、仏教という一つの世界の中に印度と韓半島が、共にあることを語るものである。最後に、天竺関連の結論ともいえる記事が、塔像篇の前後所將舍利条にある。

『三國遺事』前後所將舍利條：大教東漸。洋洋乎慶矣哉。讚曰。華月夷風尙隔煙。鹿園鶴樹二千年。流傳海外眞堪賀。東震西乾共一天。²²⁾

(現代語訳)

大教(仏教)が東方へ広がってきたことは、限りなくめでたいことである。讚に曰く、「華月(中国)と夷風(東方)、互いに煙波を隔て、鹿園の鶴樹、二千年を経たり。海外(東国)に流伝したことはまことに慶賀である。東震(東国)と西乾(印度)は一つの天を共にする」。

即ち、「東震(東国)と西乾(印度)は一つの天を共にする」と、韓国・(中国・)印度三国が一つの世界にあると語る。これは、日本が中世に持ち得た「三国世界観」と酷似するものである。つまり、本朝(日本)と天竺(インド)・震旦(中国)との関係から世界を見て、三国それぞれ経(天竺)・漢籍(震旦)・神書(本朝)に記されているように各々別々の世界の始まりを持つが、本質的には三国は一つの世界であり、それは経の説く宇宙論に基づく世界であることを確信し納得する仏教的世界観である。²³⁾『三國遺事』も同じく、仏教の普遍的世界観の中で自国の存在を確認したといえる。

21) 『三國遺事』卷三 塔像四 皇龍寺九層塔条

22) 『三國遺事』卷三 塔像四 前後所將舍利条

23) 神野志隆光, 「古事記と日本書紀」講談社 1999年 p.p.38~41

『三国遺事』において、檀君朝鮮は中国と並列して始まる。それ以後も中国との関係は、中国を上国とすることなく同等である。これは、『三国遺事』に中国に対する朝貢の記事が見えないことから明らかである。²⁴⁾さらに、中国の皇帝と同じく自国の王の死に関して、天子だけに使用する「崩」の字を使っている²⁵⁾ことから理解できる。中国の存在を無視することによってはじめて高句麗を中心とした世界観を確立しえた『広開土王碑文』²⁶⁾、中国中心の世界に入ることによって自国を保障した『三国史記』²⁷⁾。どちらにしても中国から自由ではなかったが、『三国遺事』は仏教という普遍的世界観の中ではじめて中国に対し自由でいられ、中国を中心とする世界観から抜け出た世界観を確立することができたといえる。

「仏教が天竺に興り、それが中国に伝わり、最後に韓半島に伝わった」。これは一見、仏教的世界の中でその価値の源泉を天竺とし、自分達を末端に位置づけるようであるが、古朝鮮の檀君の存在によってその地位は逆転する。即ち、古朝鮮が「桓雄降臨」により開かれた仏教教化の世界の中に建国され、かつ檀君が帝釈天の孫であることを最初に確認したことで、吉田兼俱が聖徳太子の言葉を引用して価値の源は日本にあるといったように、仏教的世界での価値の源泉として天竺・中国に対し自分たちの立場を主張しているといえる。檀君は地上世界の統治権を桓雄から得られなかったが、桓雄の子即ち桓因の孫であることがここで意味をもつ。

さらに、『三国遺事』義湘伝教条の記事を見れば、次のように書かれている。

『三國遺事』義湘伝教條：儼前夕夢一大樹生海東。枝葉溥布。來陰神州。上有鳳巢。登視之。有一摩尼宝珠。光明屬遠。²⁸⁾

(現代語訳)

智儼が前日の夜、夢をみると、海東(韓国)に大樹が生えて枝と葉が茂り、それが延びて神州(中国)を蔽い、その上に鳳の巢があった。上ってこれをみると、一個の摩尼宝珠があり、その光明が遠くまで照していた。

「海東(韓国)に大樹が生えて枝と葉が茂り、それが延びて神州(中国)を蔽い、その上に鳳の巢があった」との話は、それまでの仏教的世界の中心だった中国に変わって、韓半

24) 崔書寧 「『古事記』における死の漢字表記」 『日本文化学報』第20輯 韓国日本文化学会 2004年2月

25) 上掲書

26) 『広開王碑文』にあらわれる天下観においては、中国は存在せず、そこには百済・新羅をはじめ高句麗に支配される国々だけが存在する。

27) 朴正義 「韓日古代神話と中世神話にあらわれた世界観の比較」 『日本文化学報』12輯 韓国日本文化学会 2002年 p.p.283~287

28) 『三國遺事』卷第四 義解第五 義湘伝教條

島が中心になることを暗示するものである。これは新羅時代の話とされているが、その後中国が元に征服されることにより、中国の仏教的世界での中心的位置が崩壊したという歴史的事実を踏まえ、高麗時代に作り直された説話ともとれる。これ以外にも、『三国遺事』には仏教の中心地が天竺・中国から韓国に移ることを暗示する説話が、多く記されている。例えば、「皇竜寺丈六条」²⁹⁾に、仏教の発祥地印度において造ることができなかった仏像が、さ迷ったあげく仏教の発祥から1300余年後新羅に到り完成するという記事がある。印度で完成できなかった仏像を新羅でようやく完成したことは、仏教隆盛の地として印度より韓半島が適切な地であることを示すものである。さらに、仏教発祥以来さ迷ったあげく新羅に到着したのは、新羅が最初からその適地であることをも示しているといえる。また、「前後所将舍利条」³⁰⁾に、天から仏の歯が中国にもたらされたが、道教の隆盛とともに無用となり捨てられようとしたところ、それを高麗人が本国に持ち帰り伝えたという記事がある。仏教の隆盛としての中国はすでに失われ、その中心が韓国に移ることを暗示した説話ともいえる。

このように、『三国遺事』は仏教の世界の中に自国を位置づけることによって、将来仏教の中心地が天竺から中国そして韓半島へ移り、韓半島は未来永劫にわたって仏に護られる国となることを主張している。仏教的世界の源泉であるという主張も、これら全て、韓半

29) 『三国遺事』皇龍寺丈六條：未幾。海南有一巨舫。來泊於河曲縣之絲浦。檢看有牒文云。西竺阿育王。聚黃鐵五萬七千斤・黃金三萬分。將鑄釋迦三尊像。未就。載舫泛海而祝曰。願到有緣國土。成丈六尊容。并載模樣一佛二菩薩像。……南閩浮提十六大國・五百中國・十千小國・八萬聚落。靡不周旋。皆鑄不成。最後到新羅國。真興王鑄之於文仍林。像成。……後大德慈藏西學到五臺山。感文殊現身授訣。仍囑云。汝國皇龍寺。乃釋迦與迦葉佛講演之地。宴坐石猶在。故天竺無憂王。聚黃鐵若干斤泛海。歷一千三百餘年。然後乃到而國。成安其寺。蓋威緣使然也[與別記所載不同](現代語訳)まもなく南の海から巨船一隻が、河曲県の糸浦に来て停泊した。(船の中を)検げてみると、公文があって、(そこに)「西竺(印度)の阿育王が、黄鉄五万七千斤と黄金三万分を集めて、釈迦三尊像を鑄造しようとしたが完成できなかったので(仕方なく)船に載せて海に浮かべてますが、願わくば因縁のある国土にいて、丈六尊が完成できますよう。一の仏像と二つの菩薩像の模型も併せてのせる」と書かれてあった。……それを船に載せ、海に浮かべて南閩浮提(南方の印度国)十六大國と、五百中国、十千の小国、八万の村落をくまなく回ったけれども、みんな鑄造に失敗した。最後に新羅国に到着した。真興王が文仍林において鑄造して完成し、(仏像の)相好(顔付き)も完備した。……その後、大德(高僧)の慈藏が西方に留学し五台山に至ると、文殊が現身して秘訣(秘密の方法)をくれながら、こつたのんだ。「汝の国の皇竜寺は釈迦と迦葉仏が講演したところの地であって、宴坐の石がなおも残っている。故に天竺の無憂王が黄鉄若干斤を集めて海に浮かべ、一千三百余年をへた後に、はじめて汝の国(新羅)に到着し、その寺を完成させた。思うにこれは偉大な因縁がそうさせたのである」。

30) 『三国遺事』前後所将舍利条：崇奉左道。時國人傳圖讖曰。金人敗國。黃巾之徒 諷日官奏曰。金人者佛教之謂也。將不利於國家。議將破滅釋氏・坑諸沙門・焚燒經典。而別造小舫・載佛牙泛於大海。任隨緣流泊。于時適有本朝使者・至宋聞其事。……密授佛牙。……使臣等既得佛牙來奏。於是睿宗大喜。奉安于十員殿左掖小殿。(現代語訳)左道(道教)を崇奉するようになった。その時、国の人が「金人が国を滅ぼす」という凶讖(予言)を伝えた。黄巾(道教)の徒が日官(気象庁の役人)を動かして「金人というのは仏教をいうのであって、将来国家にとってよからぬものとなるでしょう」と申し上げた。(そのため)朝廷の議論は釈氏(仏教)を破滅させ、經典を焼き、別に小さい船を造って、それに仏牙を載せて大海に浮かべ、……こつたりも勝手に行かせようとした。その折、ちょうど本朝(高麗)の使者が宋に来ていて、その事を聞き付け、……こつたりも仏牙をもらい上げた。……(高麗)の使臣達はその仏牙をえてから帰ってきて(そのことを)申し上げた。そこで睿宗が大いに大喜び、(それを)于十員殿の左側の小殿に奉安した。

島を帝釈桓因の孫檀君が最初に開いたことによって意味を持つ。

天竺の始まりは記されていないが、中国の始りは「堯帝」という語により、堯帝が名を連ねる三皇五帝³¹⁾を踏まえて『三国遺事』に示されている。韓国・中国・天竺は別々にはじまり発展するが、仏教が最後に韓半島に伝教することにより、つまり「大教(仏教)が東方へ広がってきたことは、限りなくめでたいことである」を受けて、「東震(東国)と西乾(印度)は一つの天を共にする」と仏教のもとに世界は一つになるのである。

4. おわりに

日本の体制つまり「天皇」を頂点とする体制は、政治の実権がどこにあったかは別として、形式的に「天皇」の権威のもとに日本は成り立ち、それは少し乱暴な言い方かもしれないが現代にいたるまで変わらず続いている。こと「天皇」の問題は、日本のアイデンティティーに関わることである。だから、「天皇」は神の話でなく、現実の問題として保障する必要があった。

日本の神話は、時代時代の現実の世界を納得させるために、その世界観を変えてきた。しかし、ここで重要なのは、どこまでも「天皇」を世界の秩序の中心とすることは古代から一貫している。こと問題は、「天皇」をどう保障するかにあった。

では何故、『三国遺事』は檀君を作り出したのか。これは、国家存亡の危機に面したところで問題があった。確かに、『三国遺事』の問題は、国家存亡の危機に面して、如何に自己を確証するかであったであろう。しかし、これを河炫綱氏の「強大な外圧は民族的危機を痛切に感じさせ、民族的危機に直面した高麗社会において新羅や高句麗など特定の王朝の継承でなく、同じ祖先の子孫という民族意識を待つようになり、民族共同の始祖として檀君を意識するようになったであろう。これは必然的に韓国史に対する認識と歴史継承を民族的次元から考えさせる変化を興した。民族の象徴としての檀君に対する認識は我が民族が他の民族と区別する独自のな世界を形成しているとの意識を確立した」³²⁾という言葉に代表されるように、国家存亡の危機を民族主義によって克服し、檀君を民族の祖

31)三皇五帝は、中国の最初の世襲王朝夏の以前の時代とされる神話伝説時代の帝王で、三皇は神、五帝は聖人としての性格を持つとされている。三皇は、以下のような5説がよく知られている。天皇・地皇・泰皇(人皇)(『史記』秦始皇本紀)、伏羲・神農・黄帝(西晋・皇甫謐『帝王世紀』)、燧人・伏羲・神農(『礼緯含文嘉』一『風俗通』皇霸篇に引く)などの諸説がある。五帝は、まとまった記録としては、司馬遷の『史記』であり、黄帝・顓頊・帝嚳・堯・舜となっている。これ以外に小昊・顓頊・帝嚳・唐堯・虞舜(『帝王世紀』)などの説があるが、ともかく、堯帝は伝説上の聖君としてあらわれある。

32)河炫綱『韓国中世史研究』一潮閣 1996年1月(1988年9月) p.397

とする一つの民族の認識が生れた、と主張されてきたところに問題があった。この国家存亡の危機を克服するのは、民族主義でしかなかったのであろうか。ここから、『三国遺事』檀君をもう一度読み直す必要があった。

『三国遺事』の古朝鮮条は「桓雄降臨」神話から始まるが、この内容をテキストに則して読んでいけば、人間界を含む六欲天の第一人者帝釈天桓因の命によって桓雄天王が直接降りてきて、人間世界を仏教でもって教化する、となる。そして、この仏教でもって教化された世界の中において、帝釈天桓因の孫として檀君は生まれ古朝鮮を建国するのである。さらに、『三国遺事』は前後所将舍利条において「東震(東国)と西乾(印度)は共に一つの天なり」³³⁾と、韓国・(中国・)印度三国が同じ世界にあると語っている。則ち、古朝鮮が「桓雄降臨」により開かれた「仏教によって教化された世界」の中に建国され、かつ始祖檀君が帝釈天の孫であることを最初に確認したことで、天竺・中国に対し自分たちの立場を主張し、自己確証を行うのである。『三国遺事』檀君は、民族主義でなく、仏教の普遍的世界の中にある。

このように、韓日両国は、ともに中世に入り、韓国は檀君、日本は天皇を持つことによって、仏教の普遍的世界観に基づく三国世界観において、仏教的世界の源として自己を主張し、自己確証を行った。

【参考文献】

【日本語書籍】

- ・神野志隆光・山口佳紀『古事記』小学館 2004年12月(1997年6月)
- ・神野志隆光:「文字テキストから伝承の世界へ」塙書房 p.p.37~40
- ・神野志隆光,『古事記と日本書紀』講談社現代新書 1999年 p.34~55
- ・神野志隆光,「解題『日本書紀纂疏』」(別冊国文学『古事記日本書紀必携』)学灯社
- ・神野志隆光,『古事記』小学館 1997年 p.p.29~58
- ・片桐洋一,『中世古今集注釈書解題』(五)赤尾照文堂出版 一九八六年 所収の翻刻に

33) 『三国遺事』卷三 塔像四 前後所将舍利條

よる。

- ・国民精神文化研究所 『日本書紀纂疏』
- ・片桐洋一, 『中世古今集注釈書解題』(五) 赤尾照文堂出版 一九八六年 所収の翻刻による。坂本太郎他, 『日本書紀上』 岩波書店 1983(1967)年 p.p.78~85
- ・済川真, 『天皇がわかれば日本がわかる』 筑摩書房 1999年 p.p.117~138
- ・文部省社会教育局, 『神皇正統記』 大日本教化図書株式会社 1943(1934)年p.p.1~23

【韓国語書籍】

- ・姜仁求・金杜珍・金相鉉・張忠植・黄湏江訳 『註釈三国遺事』 I(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年11月(2002年7月)
- ・姜仁求・金杜珍・金相鉉・張忠植・黄湏江訳 『註釈三国遺事』 II(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年11月(2002年7月)
- ・姜仁求・金杜珍・金相鉉・張忠植・黄湏江訳 『註釈三国遺事』 III(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年6月
- ・姜仁求・金杜珍・金相鉉・張忠植・黄湏江訳 『註釈三国遺事』 IV(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年11月(2002年11月)
- ・姜仁求・金杜珍・金相鉉・張忠植・黄湏江訳 『註釈三国遺事』(韓国精神文化研究院) 以文化社 2003年6月
- ・金鍾権訳 『完訳原文 三国史記』 明文堂 1993年1月(1984年6月)
- ・金鍾権訳 『新完訳 三国史記上』 明文堂 1988年6月
- ・金鍾権訳 『新完訳 三国史記下』 明文堂 1988年6月
- ・河炫綱 『韓国中世史研究』 一潮閣 1996年1月(1988年9月)
- ・李弼泳 「檀君研究史」 『檀君―その理解と材料』 ソウル大學校出版部 1994年10月
- ・李基白著; 泊勝美訳 『韓国古代史論』 学生社
- ・李恩峰 『檀君神話研究』 オンヌリ(온누리) 1986年3月

要 旨

中世にはいと、韓日両国は古代に持ち得た一元帝国主義的世界観では自国を保証し得なくなり、それに変わる世界観を模索する必要に迫られた。そこに登場したのが仏教の普遍的世界観に基づかれた三国世界観である。

中世の『日本書紀』注釈書は、『日本書紀』の神話的叙述が仏教的宇宙論と合致することを確かめ、経の説くところと儒教・道教のいうところと『日本書紀』に述べるところが同じであると解釈した。即ち、天竺であれ、震旦であれ、同じ世界、価値を共有する普遍的世界観といえる。さらに、仏教的世界の中で、三国を種子(本朝日本)・枝葉(震旦中国)・花実(天竺印度)に譬え、価値の源は日本にあるという世界観を確立した。このような世界観を持つことによって、現実の世界を改めて説明し納得し、それに繋がる天皇の正統性もまた改めて根拠づけたといえる。

『三国遺事』の古朝鮮条は、「桓雄降臨」神話から始まる。その内容は、帝釈天桓因の命によって子桓雄天王が直接降りてきて、人間世界を仏教でもって教化するのである。そして、この仏教でもって教化された世界の中において、帝釈天桓因の孫として檀君は生まれ古朝鮮を建国したのである。塔像篇の前後所将舍利条に「東震(東国)と西乾(印度)は一つの天を共にする」と、韓国・(中国)印度三国が一つの世界にあると語っている。これは、日本が中世に持ち得た「三国世界観」と酷似するもので、『三国遺事』も同じく、仏教の普遍的世界観の中で自国の存在を確認しているといえる。

さらに、『三国遺事』義湘伝教条の記事では、「海東(韓国)に大樹が生えて枝と葉が茂り、それが延びて神州(中国)を蔽い、その上に鳳の巢があった」と、それまでの仏教的世界の中心だった中国が変わって、韓半島が仏教的世界の中心になることを暗示する。これ以外にも、『三国遺事』には、仏教の中心地が天竺・震旦から韓国に移ることを暗示する説話が多く記されている。これは、将来仏教の中心地が、天竺から中国そして韓半島へ移り、韓半島は未来永劫にわたって仏に護られる国となることを主張するものである。

本朝・震旦・天竺、つまり韓半島・中国・印度は、別々にはじまり発展するが、仏教が最後に韓半島に伝教することにより、仏教のもとに世界は一つになる。さらに、古朝鮮が「桓雄降臨」により開かれた「仏教によって教化された世界」の中に建国され、かつ、檀君が帝釈天の孫であることを最初に確認したことで、天竺・中国に対し自分たちの立場を主張、自己確証を行ったのである。『三国遺事』檀君は、民族主義でなく、仏教の三国的世界の中にあつたといえる。

このように、韓日両国は、ともに中世に入り、韓国は檀君、日本は天皇を持つことによって、仏教の普遍的世界観に基づく三国世界観において、仏教的世界の源として自己を主張し、自己確証を行った。

キーワード：一元世界帝国主義世界観 仏教の普遍的世界観 三国世界観古事記
三国遺事 日本書紀 神皇正統記 日本書紀纂疏 天皇 檀君

투 고 : 2010. 5. 31
1차 심사 : 2010. 6. 12
2차 심사 : 2010. 6. 26